

春

まだ冷たい海水に片掌を浸すと

^{ひかり}
陽光は水面をすべるように私の許へと集う

彼女の頭は私の肩の上

眠りの重さが静かに加わってゆく

どこまでも単純な水平線は乱されことなく

それ故に、保守を旨とする生活に無言の誘惑を送る

個なる者は孤なる地平にのみ息衝くも

それ故に無限の慈しみをもって身を寄せ合う

彼女の腕は己を抱き締め

交わることの無い想いが私の掌を伝わって水へと溶け出す

陽光は再び水面をすべり行き

私と彼女の思いを彼方へと運び去ってゆく

生は既に私たちを離れ

この砂の上で、この身は朽ち果てるであろう

祈りのみをこの地に満たしたまま・・・

(1992.3.2)